

イタリアの中学校音楽科教科書の構成と内容に関する研究

—Il metro musicale (2004) の分析をととして—

大野内 愛

(本講座大学院博士課程後期在学)

A Study of The Teaching Contents and Structure of Music Textbook of Junior High School in Italy: An Analysis of *Il metro musicale* (2004)

Ai ONOUCHI

1 研究の動機と目的

1859年イタリアでは公教育が誕生し、1894年小学校に音楽科が導入された¹。さらに、1962年にはじめて統一中学校が誕生し、中学校学習指導要領が制定された²。現在イタリアの中学校では週1~2時間の音楽の授業が行われている。イタリアにおける現在の学習指導要領の目標としては「①さまざまな種類の楽曲を個人や集団で表情豊かに演奏する。②楽曲の音楽的構造・リズム・旋律の定型を利用して、即興演奏・編曲・創作をする。③音楽言語を構成する要素を認識し、分類する。④音楽文化において重要な楽曲に触れる。さらに他の芸術との融合を図る。⑤伝統的記譜システムや他の記譜システムを解読し、利用する。⑥音楽に関連した機会を活用して、音楽そのものの構造を理解する。」³と示されている。この学習指導要領では、演奏すること（歌唱・器楽）、創作すること、音楽の基礎的要素の学習、における最終的な達成目標が示されているにとどまり、共通教材などの指定も見当たらず、具体的内容が示されているとはいえない。このことから実際の教育内容については各学校に委ねられているといえる。

こうした抽象的な学習指導要領のもとでの教科教育の示唆を与えてくれるのが教科書である。したがって、学習指導要領が抽象的であればあるほど、教科書はより系統性、連続性を有する必要がある。そこで本研究では、イタリアの中学校で実際に使用されている音楽科教科書の構成、および内容の連続性と領域間の関連性を明らかにすることを目的とする。

2 分析する教科書の概要

本稿では、Loffredo editore社が出版する*Il metro musicale* (2004)を分析する。本教科書はI、II、Quaderno（歌唱・器楽教材集）の3冊がひとまとまりで販売されている。Iは1・2年生用、IIは3年生用として使用し、必要に応じてQuadernoを使用する。

3 教科書における領域ごとの連続性についての分析

本教科書では、「作り出すこと（produzione）」、「練習（pratica）」、「鑑賞・解釈・分析（ascolto,

¹ 当時は「歌唱」（canto）という教科名で誕生したが、独立した教科ではなく、「スケッチ・歌唱・体育・作業」という教科の中に含まれていた。

² 正式名称は「1962年12月31日法律第1859号」（Legge 31 dicembre 1962, n.1859）である。

³ 2007年にイタリアでは「幼児学校および第1階梯の教育カリキュラムにおける指針」（“Indicazioni per il curriculum per la scuola dell’infanzia e per il primo ciclo d’istruzione”）が示された。その中の中学校音楽科の内容を抜粋・訳出した。

interpretazione, analisi)」の3つの領域に分けられている。まず、この3つの領域の連続性について検討する。

(1)「作り出すこと」の内容

まず「作り出すこと」という領域ではあるが、教科書Ⅰでの内容は、実際に音楽を作り出すための、音楽の基礎的要素の理解についての学習が主である。まず第1部として「自然から文化へ」というタイトルで身の回りに存在する音に耳を傾けることから始まる。そして「音」を物理的に理解するため、周波数の学習を行うなど、音の正体について理解する。第2部から読譜・記譜のための学習に入る。まずは音の読み方、音の書き方から、音符のもつ音価の学習、リズム読み、拍子の学習へと進み、第3部では、第2部の学習をふまえての階名唱も行われる。そして、音価の学習の応用として付点やタイでつながれた音価を理解したり、リズム読みの応用として複雑なリズムを読んだりする。さらに演奏のための記号（反復記号、強弱記号、速度記号、略符など）を理解し、音程の概念の初歩としてシャープやフラットといった変化記号について学ぶ。第4部では、第3部で半音の概念の学習をしたことをふまえ、音程の概念を中心に学習し、長音階や短音階の音程構造を学習する。その流れのなかで、調号や主音について触れ、移調についても学習する。またこれまではト音記号を扱っていたが、ここでヘ音記号、ハ音記号についても学習する。そして第5部では、旋律とフレーズの構造について学習を始め、旋律の一部にも含まれるトリルについても学ぶ。また伴奏についても学習するなかで、和音の構造や和声進行にも触れる。

教科書Ⅱの「作り出すこと」の内容では、教科書Ⅰで学んだ内容をふまえ、まず第1部として、音楽を形作っている構成要素である、物理的特徴（高さ、強さ、音色、長さ）、言語的特徴（リズム、旋律、ハーモニー）、文脈上の特徴（ジャンル、スタイル、演奏構成、様式）を学び、楽曲の構造を分析する。第2部では、創作の領域に入る。第1部での構成要素の学習をふまえ、ここでは「歌を作る」ための簡単な手順を紹介している。第3部では、マルチメディアを活用し、創作したものをCD-Rとして製作する。さらに第4部では、音楽と社会とを結びつけ、音楽公演を計画したり、実現したりする方法について学ぶ。そして第5部では、中学校卒業後、音楽をどのように学ぶことができるのか、また音楽に関連した職業とはどのようなものがあるのか、ということについて知る。

教科書Ⅰでは、主に音楽の基礎的要素を学習し、音楽を理解するための基礎を身につけている。「作り出すこと」の領域における本来の目的は、教科書Ⅱに見られるように、音楽の自立的活用能力の育成であると考えられる。今後の人生において音楽を自分で活用したり、音楽とともに生きていくことについて考えるなど、生涯学習の視点を読みとることができる。その目的を達成するための連続的なプログラムが「作り出すこと」の領域にはみられる。

(2)「練習」の内容

「練習」の領域は、「器楽の練習」と「歌の練習」の2つに分けられている。「器楽の練習」では、ソプラノリコーダー、鍵盤楽器（鍵盤ハーモニカ）、ギターを扱う。

「器楽の練習」から見ていくと、まず教科書Ⅰでは、ソプラノリコーダーと鍵盤楽器を平行して扱っている。第1部として、リコーダーの持ち方、鍵盤楽器の指の番号など、楽器を演奏する上での基礎の部分を学ぶ。楽器をよく観察し、音の出る仕組みを学習している。第2部からは実際に音を出す練習に入る。ハ長調の練習曲を扱うと同時に、リコーダーではリズム譜を読んで吹く練習をしたり、単純な拍子（2拍子・3拍子・4拍子）の練習曲を演奏したりする。第3部においてリコーダーでは、サミングを学び、なめらかに吹く練習をする。鍵盤楽器では、複雑な運指（音階を弾くときに親指を下から通すなど）を練習する。第4部では、リコーダー、鍵盤楽器ともに、シャープやフラットなど変化記号のついた音の演奏について学習する。第5部では、リコーダーで、より複雑な運指の変化記号のついた音を学ぶとともに、リズム吹きの2重奏をするが、旋律での2重奏は含まれていない。鍵盤楽器では和音の練習を行う。

教科書Ⅱではギターの学習に入る。リコーダーや鍵盤楽器の学習の導入のように、まずは楽器の持ち方を学び、主要なコードを学習する。第2部では、第1部で学習したコードをもとに、歌の伴奏をする。ギターの学習はここで終了し、第3部では、電子楽器として電子キーボードを紹介している。さまざまな音色を出すことができるということ、マルチメディアの機器と接続して使用することができることなど、その多様性を記載している。第4部では、合奏することにおけるルールとして、テンポを合わせること、お

互いをよく聴き合うことなどが書かれている。

次に「歌の練習」を見ると、教科書Ⅰの第1部では、器楽の学習と同じく、声の出るしくみについて学習する。そして第2部では、声を出すための呼吸器官の学習をした上で、母音の基本的な口の形を知る。第3部では、舌の位置によって声帯の位置が変わることを図示するなどして、発声の方法について学ぶ。第4部では、実際に母音唱で音階の発声練習を行い、第5部では、アルペジオを母音唱で練習する。

教科書Ⅱでは、歌の練習についての記述というよりは歌についての知識を身につける内容となっている。まず第1部では、緊張により心拍数が上がり、発汗し、口が渇くことや、歌う際の手の位置など、人前で歌を歌うときのことについて書かれている。第2部では、ソプラノ、アルトなどの声種の種類を、第3部では合唱形態の種類を、第4部ではより複雑な声の種類（リリコ、レジュエロなど）を学習する。

「器楽の練習」についても、「歌の練習」についても、まず音の出るしくみを学習したのち、音の出し方やその練習方法についてを学ぶといった連続的な構成となっていることがわかる。しかし、内容は薄く、実技の到達レベルはあまり高くないと考えられる。もう1冊の教科書である教材集には、リコーダーのための曲、歌唱のための曲など、多くの曲目が掲載されているが、どの段階でどの曲を扱うのが適しているか、などについてはまったく示されていない。したがって、実際の教員が、この教材集をどのように扱い、どのように教育していくかが問われている。

(3)「鑑賞・解釈・分析」の内容

「鑑賞・解釈・分析」の領域では、教科書Ⅰ・Ⅱで扱う内容がしっかりと分けられている。教科書Ⅰではさまざまな楽器についての理解をすること、そして音楽言語によって表された作品の構造や形式を解釈・分析することが目的とされ、教科書Ⅱでは、音楽史、民族音楽、音楽とその他との関係を学ぶことが目的とされている。

教科書Ⅰの「楽器の理解」の部分を見ると、まず第1部としては、楽器の分類とオーケストラの配置を、第2部では吹奏楽の配置を学習する。そうして楽器についての全体像を把握したのち、第2部では気鳴楽器、第3部では擦弦楽器、第4部では撥弦楽器、打弦楽器、第5部では打楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、電子楽器が紹介され、その構造についても記載されている。また、その楽器を学ぶための鑑賞曲も随時用意され、楽器の構造や音色の特徴を学習できるようになっている。

次に教科書Ⅰの作品の構成や形式の理解の部分を見ると、まず第1部では、鑑賞の初歩として、提示された楽曲を聴き、使われている楽器を聴き分ける。そして第2部では、第1部で楽器の音色を聴き分けたことをふまえ、音ではない何かを音で表現する楽曲（小鳥をフルートで表現している曲など）について知り、音楽によって人間の感情や自然の様子がどのように表現されるかを学ぶ。第3部では、変奏曲やカノン、フーガなどの楽曲を中心に扱い、その構造を理解する。第4部では、三部形式などパズルのように組み合わされた楽曲の形式について学ぶ。第5部では、1つの楽器としてピアノに焦点を当て、誕生から現在までの歴史を追うことにより、構造や音色の変化を感じ取る。またピアノとその他の楽器との重奏や協奏曲を聴き、ピアノの可能性を探る。

教科書Ⅰでは、「楽器の理解」の学習と、構成や形式の理解の学習が並行して行われる。

教科書Ⅱでは、まず第1部として古代から1500年代（ルネサンス）を、第2部ではバロック時代からロマン派を、第3部では20世紀までの音楽史を、楽曲を聴きながら、時代背景や特徴的な内容とともに学ぶ。そして第3部では音楽史の学習ののちに、世界の音楽に触れる。イタリアや他国の音楽を聴き、ジャズの歴史を学習し、商業的に使用された音楽の種類や、その歴史について学習する。さらに第4部では、音楽とその他との関連について学習し、社会において音楽がどのように活用されているか、またそれによってどのような効果をもつのかなどについて学ぶ。

教科書Ⅰにおいて、楽曲の構成や形式について学ぶことによって、教科書Ⅱではさまざまな時代の音楽の特徴をつかむ学習が可能になっており、ここに連続性が認められる。また、教科書Ⅱの段階を重ねるごとに、より社会に目を向けた内容になっていることもわかる。

4 教科書における領域ごとの関連

本教科書においては、3つの領域が存在するが、その3つの領域を並行して学習できるよう構成されている。したがって、ここでは並行した3つの領域間の関連性を検討する。

(1) 教科書Ⅰ 第1部「自然から文化へ」

「作り出すこと」の領域では、身近なもので音を発生させたり、生活の中にある音に注目させている。それをふまえ、「練習」の領域では、鍵盤ハーモニカの音の出るしくみや、声を出すための発声器官のしくみを学習している。また、「作り出すこと」において、音の特徴である高低、強弱、音色、長短について学習し、そのことをふまえて「鑑賞・解釈・分析」の領域では、構造によって分類された楽器族の音色を聴き分ける訓練を行う。

(2) 教科書Ⅰ 第2部「読むことと書くこと」

「作り出すこと」の領域において、五線譜にト音記号や音符を書く活動が行われ、またリズムや拍子についても学習する。それと関連させて、「練習」領域では、実際にリコーダーや鍵盤楽器で五線譜に書かれた音やリズムを演奏する。「練習」領域の「歌の練習」の部分で呼吸器官について学習したことと関連させて、「鑑賞・解釈・分析」領域では同じく呼吸を用いる気鳴楽器の学習を行っている。また、第1部の「作り出すこと」の領域で音の特徴を学習したことをふまえ、第2部の「鑑賞・解釈・分析」では、様子や人物や物などがどのような音の特徴を使って表現されているかを分析している。

(3) 教科書Ⅰ 第3部「音楽計画」

第2部で、「作り出すこと」で学んだことを「練習」の活動で実践したのと同じように、第3部でも、付点やタイで結ばれた音価の学習を「作り出すこと」の領域で行い、「練習」の領域でそれを実践している。「鑑賞・解釈・分析」領域におけるカノンの楽譜で使用されている反復記号は、「作り出すこと」の領域でも学習されている。また「練習」の領域でレガートで演奏することを学ぶが、その楽譜に使用されているスラーについても、「作り出すこと」の領域で学習できるようになっている。

(4) 教科書Ⅰ 第4部「謎解き遊び」

まず、第3部の「作り出すこと」でスタッカートを学んだことをいかし、第4部の「練習」領域ではリコーダーでスタッカートの練習を行うことができる。また第4部「作り出すこと」では音程の概念を学び、また音部記号、調号、主音、転調について学習している。それによって、「練習」領域ではリコーダーや鍵盤楽器で、変化記号のついた音を理解することができ、また「鑑賞・解釈・分析」領域では形式を学ぶ際に、ある楽曲内で同じ旋律が調を変えて表れても、それを理解することができる。また「練習」領域の発声練習で、ドレミファソファミレドをさまざまな調に移調して母音唱することは、「作り出すこと」で調号や主音について学んだことと関連させて学習させることができる。

(5) 教科書Ⅰ 第5部「音楽！」

「作り出すこと」の領域で、和音の概念を学習しており、それが「練習」領域における鍵盤楽器での和音の練習や、歌の発声練習におけるアルペジオ（ドミソドソミド）の母音唱と関連している。

(6) 教科書Ⅱ 第1部「感覚の理解」

楽曲の構造を分析するために、まず「作り出すこと」の領域では、音楽の物理的・言語的・文脈上の特徴を理解している。それをもとにして、「鑑賞・解釈・分析」の領域で音楽史を学習し、各時代の音楽のさまざまな特徴を鑑賞・解釈・分析している。

(7) 教科書Ⅱ 第2部「感覚の創造」

第1部と同様に、音楽史の学習は第1部の「作り出すこと」の領域で学んだことをもとに行われている。

また、第2部の「作り出すこと」の領域では、歌を作ることになっているが、その音域を決定することに関連して、「練習」領域の声種の分類についての学習ができるようになっている。

(8) 教科書Ⅱ 第3部「音楽の世界」

ここではじめて「作り出すこと」と「練習」の領域でマルチメディアの活用が組み込まれている。

(9) 教科書Ⅱ 第4部「音楽と・・・」

「作り出すこと」では音楽の公演を計画・実行するプロセスを学習し、「練習」の領域では、グループで協力して合奏することを学習し、「鑑賞・解釈・分析」の領域では音楽とその他の芸術や分野との関係について学習している。どれも、「協力」という面に目を向けた内容となっている点で系統性が見られる。

(10) 教科書Ⅱ 第5部「音楽実習」

この第5部では「作り出すこと」の領域の内容しか存在していない。

教科書Ⅰ・Ⅱの領域ごとの関連を概観すると、「作り出すこと」「練習」「鑑賞・解釈・分析」の3つの領域がすべて関連しているとは言いがたいが、いくつかの部分で関連性を見出すことができた。3つの領域を並行して学習することにより、関連をもたせながら学ぶことができる。

5 考察

イタリアの中学校音楽科教科書 *Il metro musichevole* の内容と構成を概観した結果、まず「作り出すこと」「練習」「聴取・解釈・分析」の3つの領域にはそれぞれ連続性が存在することがわかった。

「作り出すこと」では、まず音楽を理解するための基礎的内容を順序立てて学習し、その後、実際に音楽を作ったり、マルチメディアを活用したり、音楽の公演の計画を立てたりして、音楽をとおしてより社会へと視野を広げるなど、さまざまな活動に応用していく能力を育てるための連続したプログラムが存在している。

「練習」の領域では、器楽の練習と歌の練習の2つに分けられ、器楽ではソプラノリコーダー、鍵盤ハーモニカ、ギターを扱っている。器楽の練習では、各楽器の基本的な演奏方法を理解させるために、連続的に学習をすすめられるよう構成されている。歌の練習では、発声器官や呼吸器官など、声の出るしくみについて学習し、発声練習の方法へと連続的に学習する流れとなっている。しかし実際にどのように声を出すべきなのか、といった具体的内容はあまり記載されていない。発声練習の紹介もされているが、どのような声が求められるのか、などの指示も特に見られない。器楽・歌唱ともに、「練習」の領域では、他の2つの領域と比較すると、内容はあまり具体的ではなく、最低限必要な運指の学習や発声練習の方法が示されているにとどまり、あとは担当する教員が教材集をいかに効率よく活用し、実技の能力を上げていくかが問われていると考えられる。

「鑑賞・解釈・分析」の領域では、まず楽器の学習と、楽曲の構成や形式の学習が並行して行われたのち、音楽史の学習に入る。これは楽器の構造や音色の学習を行うことで、音楽史上それぞれの時代の楽曲の構成や形式の特徴を解釈することに役立つためである。楽曲の構成や形式の学習でも、楽器の音色の聴き分けという易しい内容から、形式の理解という難易度の高い内容まで連続的に構成されている。また教科書Ⅱの後半では、世界の音楽に触れたり、音楽と他の文化や物事との関連について学んだり、より視野を広げた内容になっている。

また、「作り出すこと」「練習」「鑑賞・解釈・分析」の3つの領域間にも関連性があり、系統的な構成がみられた。「作り出すこと」で学習した理論を「練習」で活用したり、「鑑賞・解釈・分析」で解釈・分析するために役立てたりするなど、領域ごとのつながりが見られる。各領域のつながりから考えると、「練習」の領域において、ソプラノリコーダーと鍵盤ハーモニカは教科書Ⅰで並行して学習されるが、ギターの学習だけが教科書Ⅱに掲載されている根拠も見えてくる。つまりリコーダーと鍵盤楽器は、主に五線譜の楽譜どおりに演奏し、旋律楽器として用いられることが容易であるが、ギターは伴奏楽器としての

役割が大きく、まず和音の学習を行うことで、よりギターでのコード演奏が容易になるのではないかと
いう配慮があつてのことであろう。

イタリアにおける学習指導要領は抽象的で、また各学年における指示が特に存在しないが、教科書にお
いては、各領域の内容に連続性をもたせ、さらに各領域間に関連性をもたせることによって、順序立てて
目的へと到達させることができる考える。また、学年が上がるごとに、学習する内容が音楽的なものから、
他の分野との関連を考える、総合的なものとなっていることも特徴の1つである。教科書Ⅱの内容は、段
階を追うごとに、学校外の世界に、より目を向けた内容が含まれていることがわかる。歌の創作の手順、
マルチメディアの活用、他国の音楽、商業的な音楽、音楽の公演の計画・実施の手順、人と協力しての合
奏、音楽とその他の関連、音楽分野に関わる職業など、中学校を卒業してからも音楽とふれ合い、音楽と
ともに生きていくための学びが顕著に現れており、今後の人生において活用することのできる能力を培っ
ている。さらに音楽の知識を深めたい生徒のために、音楽の能力を職業でどう生かすことができるかなど、
生涯学習の視点が見られる。

6 おわりに

本稿では、イタリアの学習指導要領が抽象的であり、到達目標だけが示されているという問題点を解決
するために、教科書の構成が連続的で、領域間に関連性があるべきだ、という仮定のもと、分析を進めた。
その結果、学習指導要領で示された目標に到達するための、連続的かつ領域間に関連性をもつプログラム
構成を見出すことができ、さらに到達目標を超えて、生涯音楽を愛好し、音楽とともに生きていくこと
を可能にするための方法を身につけようとする内容が見られた。

日本の学習指導要領においても、中学校第2・3年生の目標には、「生涯にわたって音楽に親しんでいく
態度を育てる」という文言が含まれている。実際の教育現場においても、音楽が好きで、生涯にわたって
音楽と関わりながら生きていきたいと考えている生徒は多く存在する。したがって実際に音楽とどのよう
に関わっていくことができるのか、その手段や方法を学校でしっかり学習させることも、大切なことなの
ではないだろうか。

また本教科書において、非常に興味深いと感じたのは、身の回りにある音の学習からはじまり、社会の
中で音楽と関わりながら生きるための学習で終わるといふ、常に人間の人生や生活と音楽が関わっていること
を印象づけるような構成になっていることである。「音楽は協力、社会化、理解、自立、創造力の育成等
のための場を与えてくれる」とイタリアの学習指導要領音楽科の前文に書かれてあるように、音楽が教科
として学校教育に存在する意義は、「人間教育」であり、音楽という教科がそのための役割を果たす手助
けをしてくれる存在であるという考えのもとで、教科書が構成されている。このことは、日本の音楽科教
育においても、何らかの示唆を与えてくれるものではないかと考える。

参考文献

- De Pascale, A., *Il Metro Musichevole*, Loffredo, 2004.

表 1 教科書 I における教科書の内容の構成

| | 作り出すこと produzione | 練習 pratica | 鑑賞・解釈・分析 ascolto, interpretazione, analisi | |
|--------------------|---|---|---|--|
| 第 1 部 自然から文化へ | <p>【自然から文化へ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 身近な物で音を発生させたりして、生活の中にある音に注目させる。 <p>【音の特徴】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音の高低、強弱、音色、長短を定める方法を理解する。(周波数など) | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> リコーダーの持ち方、音の出し方、穴の閉じ方を学ぶ。 鍵盤ハーモニカの音の出る仕組みを理解し、鍵盤を観察する。 <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> リコーダーで左手を使う音から右手を使う音へと練習する。 フェルマータと反復記号を理解する。 リズムを吹く。 <ul style="list-style-type: none"> 2 拍子, 3 拍子, 4 拍子の練習曲を演奏する。 鍵盤楽器での音の場所と通指番号を理解する。 鍵盤楽器で隣接音と跳躍音 (〜3 度) の練習をする。 | <p>【歌の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発声器官を学習する。 「AIEIOU」と発声するときの口の形を知る。 <p>【楽器の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発声器官についてその構造を学ぶ。 吹奏楽の配置を理解する。 | <p>【音楽言語】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽の記述的・喚起的な特性に根ざした鑑賞へと導くための初歩段階を理解する。 <p>【形式をもつ内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽以外の何かを音や音楽で表現している作品を鑑賞する。 |
| 第 2 部 読むことと書くこと | <p>【読むことと書くこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音の書き方、音の屈き方 (聴覚器官)、音の名前、ト音記号の書き方を学ぶ。 <p>【音を構成すること】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽言語の必要条件であるリズムについて、書いたり、さまざまにリズムを聴く。 <ul style="list-style-type: none"> 2 拍子, 3 拍子, 4 拍子を理解する。 全音符 (休符) から 64 分音符 (休符) までを理解する。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> リコーダーのサミングを使う音を練習する。 レガートで演奏する。 鍵盤楽器で複雑な通指の練習をする。 | <p>【楽器の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 撥弦楽器についてその構造を学ぶ。 | <p>【音楽計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> カノン、フーガ、変奏曲など、作品の構造や形式を理解する。 |
| 第 3 部 音楽計画 | <p>【読譜・記譜・演奏のためのほかの要素】</p> <ul style="list-style-type: none"> 階名唱の方法 (歌う階名唱、読む階名唱) を理解し、練習する。 付点やタイでの音価を理解する。 変則的なリズムの音価を理解する。 シンコペーションのリズムを理解する。 フェルマータ、スラー、スタッカート、アクセント、テヌート、オクターブ表示、反復記号、略符、強弱記号、速度記号を理解する。 半音の概念とシャープ、フラットを理解する。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> リコーダーでスタッカートを演奏する。 シャープやフラットのついた音の練習をする。 鍵盤楽器で、半音の演奏について学ぶ。 <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> リコーダーで、シャープやフラットのついた音の練習をする。 リズム吹きの 2 重奏をする。 鍵盤楽器で和音の練習をする。 | <p>【歌の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発声練習として、ドレミファソファミレドをさまざまな調で母音唱する。 <p>【歌の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発声練習として、アルペンジオ (ドミソドソミド) をさまざまな調で母音唱する。 | <p>【謎解き遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽作品の十四連あ形式を学ぶ。 <p>【楽器の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 打楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、電子楽器とその構造を学ぶ。 <p>【楽器の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 打楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、電子楽器とその構造を学ぶ。 |
| 第 4 部 謎解き遊び | <p>【言語学のような音階】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音階の概念と、長音階や短音階の音程構造を理解する。 音階記号 (ト音記号、ヘ音記号、ハ音記号) を学習する。 調名、主音について知る。 転調について触れる。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> リコーダーで、シャープやフラットのついた音の練習をする。 リズム吹きの 2 重奏をする。 鍵盤楽器で和音の練習をする。 | <p>【歌の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発声練習として、ドレミファソファミレドをさまざまな調で母音唱する。 | <p>【謎解き遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽作品の十四連あ形式を学ぶ。 <p>【楽器の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 打楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、電子楽器とその構造を学ぶ。 <p>【楽器の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 打楽器、膜鳴楽器、体鳴楽器、電子楽器とその構造を学ぶ。 |
| 第 5 部 音楽！ | <p>【和声と旋律】</p> <ul style="list-style-type: none"> 旋律とフレーズの構造を理解する。 トリルに触れる。 伴奏について学ぶ。 和音の概念を理解し、カデンツァの和声進行を学ぶ。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> リコーダーで、シャープやフラットのついた音の練習をする。 リズム吹きの 2 重奏をする。 鍵盤楽器で和音の練習をする。 | <p>【歌の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> 発声練習として、アルペンジオ (ドミソドソミド) をさまざまな調で母音唱する。 | <p>【ある楽器の歴史〜ピアノの発展〜】</p> <ul style="list-style-type: none"> 西洋の楽器の歴史をとおして、使用のスタイルや可能性を探る。 |

表 2 教科書Ⅱにおける教科書の内容の構成

| | 作り出すこと produzione | 練習 pratica | 鑑賞・解釈・分析 ascolto, interpretazione, analisi |
|--------------------|--|---|--|
| 第 1 部 感覚的 理解 | <p>【音楽を使って遊ぶこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽曲の構造を分析する。 ・音楽の物理的特徴(高さ, 強さ, 音色, 長さ)と, 言語的特徴(リズム, 旋律, ハーモニー)と, 文脈上の特徴(ジャンルやスタイル, 演奏構成, 様式)を理解する。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギターの手の位置を知る。 ・主要コード表 | <p>【音楽史】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古代～1500 年代 (ルネサンス) までの音楽の歴史を学ぶ。 |
| 第 2 部 感覚的 創造 | <p>【歌を作るためのいくつかの示唆】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単純な構造の知識やその使用から離れ, 声や楽器を使って音楽を創造する。 ・歌詞の内容や構造の選択, 拍子や調などの音楽的な選択をして作品を作る。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギターで歌の伴奏をする。 | <p>【音楽史】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バロック～ロマン派までの音楽の歴史を学ぶ。 |
| 第 3 部 音楽の 世界 | <p>【マルチメディアの製品を製作する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マルチメディアを利用して, 音楽の CD-Rom を製作する。 ・製作の段階を理解する。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな音色を出すことができる電子楽器としての鍵盤楽器について知る。 ・マルチメディアと接続する。 | <p>【音楽史】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・20 世紀のさまざまな国における音楽の歴史を学ぶ。 <p>【音楽の世界】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イタリアや他国の民族音楽を聴く。 ・ジャズの歴史や内容を学ぶ。 ・商業的な音楽の種類や歴史について学ぶ。 |
| 第 4 部 音楽と ; | <p>【音の行程 : 公演の組織】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽公演を組織したり実現したりする方法を学ぶ。 | <p>【器楽の練習】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで合奏することに触れる。 | <p>【音楽と . . .】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽とその他 (ダンス・人間・劇場・映画, 宣伝・技術など) の関係について知る。 |
| 第 5 部 音楽実 習 | <p>【音楽分野で働くということ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽的能力と職業の関係を知る。 ・イタリアにおいて音楽を学ぶことのできる専門的機関を知る。 <p>【実際の音楽の職業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・より専門的な道について知る。 ・演奏家, 教育学者, 歴史家など, 音楽的な職業を知る。 | | |